

学びの軌跡を残す評価で 子どもたちの成長の実感を高める

香川県 香川大教育学部附属高松小学校

香川大教育学部附属高松小学校の子どもは、学力は高いものの、テストの結果に目が向きがちで、自己評価が低い傾向が見られた。そこで、学習課題の内容を見直すと共に、個性を大切に、思考力などを適切に評価する方法を導入。徐々に協同して学び合う姿が見られるようになってきた。

背景・課題

- ◎学力は高いが、行動よりも考えが先行し、多様な体験が不足していた
- ◎結果に目が向きがちで、自己評価が低かった
- ◎多様な人間関係づくりに課題が見られた

評価に関する取り組み

- ◎思考力・判断力・表現力などを育む「パフォーマンス課題」を導入。同時に、思考力などが見えやすい評価方法を取り入れ、子どもの問題解決の過程を把握しやすいようにした
- ◎6年間の学習の軌跡を記録した作品集（ポートフォリオ）を作成。子どもが自信を深めるきっかけとした

成果

- ◎子どもが学習課題を「自分自身の問題」と捉え、前向きに取り組むようになった
- ◎問題解決型の学習を通し、協同して学び合う姿が目立つようになった
- ◎教師による子どもの理解が進み、指導と評価の一体化が深まった

背景

全体的に学力は高いが 自己評価の低い子どもたち

香川県高松市の中心部に位置する香川大教育学部附属高松小学校には、市全域から子どもたちが通う。教育熱心な保護者が多く、新しい取り組みにも協力を得られる環境にある。子どもの学力は総じて高いが、その半面、持っている情報に行動が伴わず、多様な体験が少ないという課題もある。

背景の1つには、実質的に校区がないため、地域社会の中で子どもが人間関係を構築する場がほとんどないことが挙げられる。そのた

S c h o o l D a t a

◎1890(明治23)年に開校。香川大教育学部の附属校として、教育の理論と実践に関する研究を行う。2010年度から「自ら学び、自信をもって共に伸びる子の育成」をテーマに研究を進めている



校長 柳澤良明先生

児童数 672人 学級数 19学級

所在地 〒760-0017 香川県高松市番町5-1-55

TEL 087-861-7108

URL <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~takasyo/>

公開研究会 2013年2月7日(木)、8日(金)予定

子どもが伸びる学習評価

め、集団の中で力を発揮することが苦手な子どももいるという。副校長の滝川稔先生は次のように話す。

「多くの子どもが、テストの得点や評定値などに目が向いてしまい、自分の良さや努力したことに気付けなくなっていました。毎年、子どもから取っているアンケートでも、『もっと出来るようにならないといけない』などと、自分に厳しい評価をする子どもが目立ちます。そのため、学習活動を通して、『一人ひとりの良さが授業の中で生きている』というメッセージを、強く発信していく必要があると感じています」

探究活動や縦割り活動で自己肯定感を育む

こうした課題を踏まえ、同校は、通常の「科学習」に加え、「楷の木活動」「ふれあい学習」を教育の3つの柱に据えている。

楷の木活動は、自ら学び自ら考える子どもの育成を目指し、自己肯定感を高めることをねらった学習活動だ。3年生から始まり、年間を通して1つのテーマを探究する。

3～5年生はコースを選択し、6年生は個別にテーマを設定する。例えば2011年度、4・5年生のコースには、「災害について―東日本大震災について調べ、今、自分出来ることを考え、実際に行動して多くの人に呼びかける―」ものづくり―小さい子や友だち、

家族などが楽しんだり喜んだりするものをつくったり、発明したりする」などがあった。

6年生は一歩進んで、個々の問題意識からテーマを設定する。「捨て犬の現状を調べ、その数が減るように多くの人に呼び掛けた」「身近なことや感じたことを絵手紙にして、お世話になった人に感謝の気持ちを込めてプレゼントしたい」など、子ども一人ひとりが自分で決めたテーマに取り組んだ。

ふれあい学習は、地域社会とのつながりが弱く、人間関係づくりが難しいという課題に対応して始めた。学年縦割りの班を中心として、遊びや清掃、栽培活動、共同給食などを継続的に行い、多様な人間関係の中で個性を発揮する機会を設けている。

■評価の工夫①


子ども自りに課題を見いださせ思考力や判断力などを見取る

教科学習においては、07年度から「活用する力」に着目した「パフォーマンス評価」の研究を始めた。10年度からはこれを発展させ、思考を重視する単元で、子ども自らが課題を見いだし解決していくような「パフォーマンス課題」の研究に取り組んでいる。研究主任の廣瀬貴志先生は次のように説明する。


「以前の研究では、子どもに知識を与え、それらを活用する課題に取り組み授業が中心でした。教師から課題を与えられるという点



香川大教育学部附属高松小学校校長
柳澤良明 やなぎさわ・よしあき
「あいさつをしつかりし、皆が学校に来てよかったと思えるような、世界一元気な学校を目指す」



香川大教育学部附属高松小学校副校長
滝川 稔 たきがわ・みのる
「副校長として、その時々最善を尽くす。また、子どもと接する時間を出来るだけ長く持つ」



香川大教育学部附属高松小学校
研究主任
廣瀬貴志 ひろせ・たかし
「喜びも悲しみも分かち合いながら、学び合える子どもたちを育てたい」

で、子どもにとっては受け身の学習であり、生き生きとした姿があまり見られないという反省がありました。そこで、10年度からは、子どもに自ら課題を見いださせ、『自分自身の問題』として取り組ませるような授業を目指して、研究を進めています」

4年生社会の「ごみのしよりと利用」(全14時間)を例に見てみよう。授業は、根幹となるイメージや資料などを提示することから始まる。最初の3時間は、ごみのイメージについて話し合い、高松市の年間のごみの量の変化を調べる。ここで、子どもたちは年々増えていたごみの量が1998年頃から急に減り始めていることに気付いた。「どうして減っているのだろうか」という疑問を抱き、ごみの処理の仕方などへの関心に移っていく。

このように、子どもに課題意識を強く持たせることで、ごみ処理やリサイクルについて調べたり、ごみを減らす方法を考えたりするなど、主体的に学習できるようにしている。

「課題は日常生活で身近に感じられるものを設定し、子どもが目的を明確にして問題解決を出来るようにしています。あらかじめ教師が課題を想定し、子どもがそれに気付くように促すこともあります。どちらかという、課題の内容にある程度の幅を持たせておき、子どもが話し合っただけで決められるようにしています。そのほうが、子どもの課題意識がより強まるからです」(廣瀬先生)

子どもが課題を検討する際に、教師が留意しているのは、動機付けはあるか、ゴール(方向性)は明確か、全体の見通しを持って学習を進められるか、協同する場面はあるかといったことだ。

課題に対しては、「ループブリック(評価指標)」を用いる。評価はA・B・Cの3段階とし、子ども一人ひとりの問題解決的思考を見取る。例えば、「ごみのしよりと利用」のループブリックは次の通りだ。

A 社会事象などに問いをもち、既有的知識や身の回りの事象とつなげながら予想し、問題解決に迫るための道筋を表現している

B 社会事象などに問いをもち、既有的知識や身の回りの事象とつなげながら予想している

C 社会事象などに問いをもっている

「客観性や妥当性を持たせるため、ループブリックは、発達段階などに関する校内全体の議論を基に作成しています」(廣瀬先生)

■評価の工夫②

成果物を1冊にまとめ 成長と学びの連続性に気付かせる

通知表をはじめとした学びの成果の評価にも工夫を凝らす。1つは、入学時から自分の学びの軌跡を作品集(ポートフォリオ)にまとめていくことだ。社会科で作った歴史新聞、理科で行った実験のまとめ、夏休みの絵日記、学期ごとの振り返りプリントなど、授業で書いたものをファイルにとじていく。楷の木活用、ふれあい学習用のファイルもある。

「ファイルは所定のロッカーに入れており、子どもは自分のファイルを見て、伸びを実感したり、自己分析をしたりしています。学びの過程の記録にもなるため、単元間のつながりを感じ取ることが出来るようです。また、子ども同士で作品集を見せ合う場面も設け、学び合いも促しています」(廣瀬先生)

更に、各ファイルから活動の振り返りなどのエッセンスとなる部分をまとめて、従来の通知表に当たる「学びの光」というポートフォリオ(写真)にする。これを2年間で1冊作成。卒業時には3冊が完成することになる。

「『学びの光』には6年間の学びの流れが記

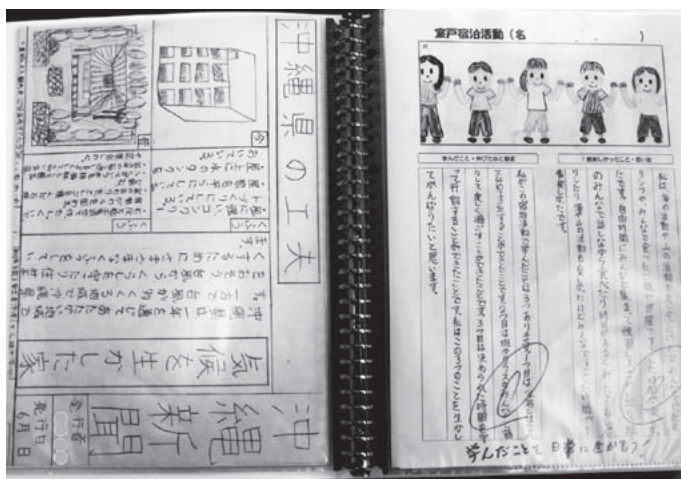


写真 子どもの学びの軌跡をまとめた「学びの光」。6年間を通しての成長が自分でも分かり、自己肯定感につながる。多くの子どもにとって、作品集は宝物になるという

録されることになり、卒業時には自分の思考力や表現力などの成長が手に取るように分かるものとなります。学期ごとに家庭に持ち帰り、保護者にも目を通すようにしてもらっています。『何を学んでいるかが分かりやすい』と好評で、学校の教育活動への信頼感にも結び付いていると感じます」(滝川副校長)

もう1つは、文部科学省が示す観点を参考にして、独自に研究し作成した評価観点だ。教科の評定と楷の木活動、ふれあい学習の振り返りシート(図)から成る。思考力のように目に見えにくい力や態度が評価の対象となる部分では、個々の子どもが自分の伸びを実

子どもが伸びる学習評価

図 4年生2学期「楷の木活動振り返りシート」

4・5年

自分の課題：自分たちの地域を盛り上げるために、地域のことを調べたり、盛り上げるための作戦を考えたりして、香川のPRイベントを開催しよう。

■2学期の自分の成長をみつめてみましょう。

○→よくできた ○→できた △→がんばろう

自分からみた成長	継続	課題解決に向けての活動が継続している。特に深く問題解決を続けている。	○
	協同	友達やかかわった人に働きかけ、活動している。自分や友達の活動のよさについて、交流を通して見つけている。	◎
	創造	課題解決に向けて、新しい自分の考えを見つけている。自分の活動を振り返り、いろいろな見方で解決方法を発見している。	○

特に成長したと思う事
成長したと思う事は2つあります。
1つ目は、PRのためにどういう方法で来てもらうかの自分の意見をみんなに積極的に伝えた事です。前は、自分ではなかなか言えなくて、人の意見ばかり聞いていたけれど、今は、「ここに大鳥の特設などを書くこととか、お礼状でやさしい花言葉の紙を作って、それにオススメを書こうよ」など、おさんの意見ののべれるようになりました。
2つ目は、ずっと交流を続けられたことです。3年生のころから、大鳥青松園の入所者の方と手紙やおくり物で交流を続けていましたが今回は、私から送って、3月11日の発表を見に来て下さいねと手紙を送りました。さらに、その方からコメントをもらったり質問に答えたりしました。まだまだ活動を続けたいです。

続けたいことや生活に生かしたいこと
とてもありましたが、まだまだ交流を続けていきたいです。さらにもっと大鳥のウララ話や、ウララの知所を交わりたいです。
生活に生かしたいことは大鳥で教えた「差別をくばい」ことです。大鳥だけでなく体のしょうをもちている人にもやさしくしたいです。

先生から
元いっぺん頑張ると笑顔の姿、視点は素晴らしい。大鳥が大好きな子にあってはうれしく思います。心掛けて活動してほしいです。多岐にわたる活動を頑張る姿が、大鳥の現状に大変役に立っています。

*同校の資料をそのまま掲載
学期ごとの「評価観点」(同校は2学期制)は Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトからダウンロードできます
<http://benesse.co.jp/berd> →「情報誌ライブラリ」(小学校向け)

うと考えて
りを付けよ
究に一区切
とめて、研
の実践をま
中に今まで
また、12年度
る予定だ。
ムを改善す
カリキュラ
今後、更に
を踏まえ、
を踏まえ、
を踏まえ、

学校で学ぶことの大きな意味だと感じます」

高まっています。このような学び合いこそが、

議題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が

テーマを学ぼうと、子どもなりにこだわりを持って取り組むようになりました。また、問題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が

「自分にとってやりがいや必要性のあるテーマを学ぼうと、子どもなりにこだわりを持って取り組むようになりました。また、問題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が

成果

評価づくりの過程で改めて子どもに付けたい力を考える

評価の工夫はどのような成果を生んでいるのだろうか。柳澤校長は次のように話す。

「自分にとってやりがいや必要性のあるテーマを学ぼうと、子どもなりにこだわりを持って取り組むようになりました。また、問題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が

感できるように、具体的な観点が示され、教師と対話しながら記入する形をとっている。

育てることに直結していると思います」

学習評価で見えてきた子どもの実態や課題

「子どもにどのような力を付けたいか、どのような授業や指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考えることにもつながると捉えるようになりまし

た。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」

「子どもにどのような力を付けたいか、どのような授業や指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考えることにもつながると捉えるようになりまし

た。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」

保護者には、保護者会などで育てたい子ども像や学習内容を繰り返し発信していること

もあり、知識や量的な面だけでなく、「生きる力」を育てることの本質的な意味が徐々に理解されつつあるという。

また、学習課題や評価を見直すことは、教師にとっても将来を見据えて子どもに付けた力を改めて考え、内容を深めるきっかけにもなったと、廣瀬先生は話す。

「子どもにどのような力を付けたいか、どのような授業や指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考えることにもつながると捉えるようになりまし

た。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

私は本校と大学を週に何度か行き来する、特殊な立場にあります。私の考える校長の役割は、研究を推進するために先生方が自分の考えを遠慮なく言い合えるような雰囲気づくりをすることです。また、先生方がきちんと議論を出来る時間や場を確保することも心掛けています。

対外的には、保護者や卒業生、大学とのパイプ役になることを大切にしています。支援いただいている方に、感謝と共に成果をしっかり伝えるようにしています。

校長 柳澤良明先生

ミドルリーダーの役割

校長や副校長のリーダーシップの下、先生方が同じ方向を向いて研究が出来るように、具体的な目標や方策などを示すことを大切にしています。そのためには、一人ひとりの先生方が自分の課題に向き合った研究が出来るという自由度と、学校全体の方向性を見失わないというバランスを取ることが重要です。また、何よりも子どものための研究であることを常に校内に示すことも、私の役割だと思っています。

研究主任 廣瀬貴志先生